

平成 14 年度 海外研修補助報告

Le Domaine Forget で思う

田辺 良子

カナダ東部にあるケベックシティからセントローレンス川に沿って 150 Km 程北上するとハイクラスのリゾート地として有名なシャルルヴォワがある。その少し手前のサンティレネで開催されている **Le Domaine Forget** という音楽祭に行ってきた。この音楽祭は今年で 24 年目だそうで日本ではあまり知られていないもののなかなか規模も大きく、演奏会の案内には巨匠たちの名がずらりと並んでいる。P. ズッカーマン、P. アモワイヤル、C. イヴァルディ、E. パユ、A. ビルスマ等々…。6月15日から8月31日まで開催されていて、クラシックからジャズまでいろいろなジャンルの演奏会が最低週3回はある。

ここでは原則的に2週間以上の滞在が義務付けられるが、私は大学の夏期講習でレッスンをする為どうしても8月4日には大阪に帰っていなければならないのでレジス・パスキエ教授のマスタークラスのみ参加という特別な条件を認めてもらった。しかしその為にオフキャンパス生という事になり、自分で近くのペンションに片っぱしから電話をかけて練習時間等の条件を直接交渉した上で予約をしなければならなかった。

ケベックシティからバスが1日3本あるのでそれでサンティレネ下車とだけ指示があったものの、行き先や路線、バス会社の名をインターネットで調べたがわからない。東京のカナダ大使館にも問い合わせたがあまりはっきりした事はわからず、交通公社ではその存在すらまったく知らない様子で不安なまま日本を発った。地球儀で見るとちょうど日本の裏側に位置する場所だけに途中一泊しないと飛行機の乗り継ぎ便の関係上行けない。私は往復共トロントの空港前のホテルに泊まった。空港直結と書いてある宣伝文句を信じて大阪のホテルグランヴィアの様につながっているの

かと期待して行ったが、それは見事に裏切られた。空港ビルを出ると車がゴーゴーと音をたててカーレースさながらのスピードで走っている道があるのだが、その道に立っているたくさんのポールの中から所定の番号のものを捜してそこで待つ様にと案内人に言われた。そこには空港リムジンサービスの有る複数のホテルのシャトルがそれぞれ現れるので自分のホテルのバスが来るまでに私の眼は睡眠不足も手伝って乾ききっていた。

次の朝早くトロントを出発、昼頃やっとケベックシティのジャンルサージュ国際空港に到着した。家を出て 34 時間後の事である。飛行機を降りて空港ビルまで自分で外を歩くという国際空港という名からは想像もできない所で、出発も到着もゲートは 1 つだった。ここからいったんタクシーでダウンタウンにあるバスディーポまで行き、楽器とスーツケースを持って行き先のわからないバスを捜す気にはなれない。おまけに雨が降っていた。タクシーに乗ってサンティレネにあるペンションの名を言うと運転手はすぐには走り出さずに車を路肩に停めた。「そこはかなり遠いよ。知ってる?」「180 ドル位かかるぜ。」私がお金を持っているのか心配だった様である。慣れると話好きな人で、観光ガイドの様にいろいろ説明してくれた。セントローレンス川沿いの道を走ること約 2 時間、やっと宿に着いた。いかにも高原の素敵なペンションといった感じの絵に描いた様な建物で嬉しくなった。しかしホッとしたのも束の間、フロントには英語が全くわからないという女性が 1 人いるだけだった。私は目の前が真っ暗になった。なんとか私のあやしげなフランス語で切り抜けた。そういえばケベックは住民の 95% がフランス系カナダ人という完全なフランス語圏だと何かで読んだ事を思い出した。しゃれた部屋だったが電話がなく、時代をさかのぼったみたいで気が遠くなった。緊急の時等どうやって連絡をとれというのか。

音楽祭用の宿舎ではないので宿泊客はバカンスに来ている人がほとんどで、夕食もそういう人達に合わせたのかフルコース料理のみで宿泊費に含まれている。1 日め、メインディッシュが出てくるまで 1 時間半かかった。目の前にはセントローレンス川の雄大な姿。このセントローレンス川は全長 3000 Km という世界でも有数の大河で、五大湖（正確にはオンタ

リオ湖)から大西洋へと流れている。淀川が75 Km、日本一の信濃川でも367 Kmであるからその桁外れの規模は我々の想像を絶する。ここサンティレネ付近での川幅は25 Kmだと聞いた。大阪・神戸間といった所であろうか。つまり晴れるとかすかに見える向こう岸までは新快速で25分。川というよりはまるで海の様である。ここでゆったりと景色を楽しみながらコースディナーを食べられるという贅沢。バカンスならうってつけなのだが私はそれどころではなかった。早く部屋に帰って練習がしたかったし、又、夜8時からコンサートがある時はすぐにキャンパスに戻らねばならないので気が気ではなかった。回りにはレストランはおろか他に店などなく、おにぎりや菓子パンで済ませるわけに行かない。日本のコンビニの有り難みをこの地でつくづく感じた。結局、前菜、スープとデザートすべて放棄してメインディッシュだけにしてもらって時間の問題を解決する以外に道はなかった。あの時のデザートはどんなだったのだろうと今でも気になる。

キャンパスというのは山の斜面にいわゆる山小屋が散在しているだけのもので、それぞれのコテージに名前がついている。その一つ、フランソワ・ベルニエホールは1996年にできたというすばらしい木のホールで、演奏会はすべてここで行なわれる。夜になると音楽会を楽しみにケベックシティあたりから皆ゾロゾロとやって来る。いかにも外国らしく街をあげてのイベントで、どの電柱にもLe Domaine Forgetののろしが誇らしげに掲げてある。各小屋の間は山道なのでジグザグになっており、少し登るのにも遠回りになる。しかも勾配はかなりきつかった。レッスンのあるコテージは山の上の方にあり、毎朝毎晩山の登り降りでクタクタになった。正式に登録していればこの中腹あたりのコテージに寝泊りできたのに。なんでもここは熊が出るらしいとパスキエ氏が教えてくれた。キャンパスからの眺めは格別で、パスキエ氏曰く「僕は演奏で世界中を回っているが、この景色は世界一だ」と。ちょっとした雲の動きで毎分変化する景観は確かにすばらしかった。山の登り降りには近道もあって教えてもらったが、それこそ熊が出てきそうで、ヴァイオリンを持ってレッスンにふさわしい格好で歩ける様な場所ではない。そのうち1日に1回しか山を

登らなくてすむ方法を見つけた。レッスンのコテージからさらに登っていくとヒュッテがいくつかあって、2 畳足らずのただの木の小屋だが一応練習はできる。水滴が肉眼ではっきり見える程のひどい湿気で、楽器には悪影響だがレッスンやピアノとの合わせの間の空き時間はペンションには戻らず、そこを利用する事にした。日本で弾く時間のない状態が続いていた私は何より弾きたかった。恵まれた大自然の中でのレッスン、また文字どおり寸暇を惜しんでの練習、そしてクラスの聴講と音楽三昧の贅沢な 4 日間が過ぎた。最後の晩はパスキエ氏のリサイタルがあって、これが私にとって貴重な体験となった。自分の師事している先生の演奏を生で聴く事がいかに感動的であるかをはじめで知ったのである。

確かに私はこれまでに多くの良き師に恵まれたと思う。しかし不思議な事に実地の演奏活動を通じて学ぶ事ができたといえるのは実にパスキエ氏が最初なのである。ヴァイオリンの実技を指導する教師となって以来、舞台上で実際に演奏して見せる事がレッスン室であれこれ指導するのに比較してどんなにすぐれた教育効果をもたらすかを私自身実感できた事がこの研修の一番大きな収穫であったかも知れない。私の言いたいのは、レッスン室で演奏技法を教える事ができても音楽が演奏を通じて聴き手に与える感動まで教える事はできないという事である。教職に身をおく者にとって演奏の目的は、研究成果の発表と演奏上必要な実用的ノウハウを指導する為に是非積んでおきたい経験だけではなかったのだ。実際に演奏するという事は周到な準備と公開の場で失敗を許されない緊張を伴うものだが、そうした、やり直しのきかない場で持てるものすべてを出し切って演奏する姿を直接目にする事によって聴き手が受ける刺激、励み、そして感動こそがまさにかけがえのないレッスンそのものなのだ。この貴重なレッスンを通して師弟の絆は一層強まり、学ぶ者を修行の道へと駆り立てるのではなからうか。

最後に、この研修のために敬愛会から助成金を頂いたお礼を申し上げます。